

## メッセージアウトライン

### コリント人への手紙 第一5:1～5 「不品行のさばき」

[1] 「あなたがたの間に不品行があるということが言われています。しかもそれは、異邦人の中にもないほどの不品行で、父の妻を妻にしている者がいるとのことです」

コリントの教会はパウロが労苦して開拓し、その基礎を据えた教会であった。しかしその教会に何と不品行、それも近親相姦という問題が起こっていた。パウロの嘆き、憤りはどれほどのものだったのだろうか。これは律法だけではなく世間一般の法に照らしても大きな罪である。→レビ記20:11

[2] 「それなのに、あなたがたは誇り高ぶっています。そればかりか、そのような行いをしている者をあなたがたの中から取り除こうとして悲しむこともなかったのです」

コリント教会は重大な罪を内に抱えていたのに、それを関知せず見過ごしていた。それなのに彼らは誇り高ぶっていた。これは教会とは何かということについて彼らが全く誤解していたことから発したことではないか。クリスチャンはキリストにあって罪赦され自由なものとされている。しかし、その自由を自分の体をもって神の栄光を現すために、お互いの徳を立てあうために、用いていかなければならない。→Iコリント6:19～20

それがコリント人たちにとっては自由が放縦となり、自分勝手となり、他人の罪に対しては無関心となっていた。

当然そのような生き方からは、不品行をしている者を大目に見て取り除こうともしない。自らの痛みとして受け止め、嘆き悲しみ、さばき、罰することもない。しかしパウロはこの問題を見過ごしたりしない。これは教会存立の根本に関わることである。

[3] 「私のほうでは、からだはそこにいなくても心はそこにおり、現にそこにいるのと同じように、そのような行いをした者を主イエスの御名によってすでにさばきました」

パウロはこの時、小アジアのエペソで伝道していた。しかし、その身はエペソにあっても心はコリントへ飛んで、そのような行いをした者を、主イエスの御名によってすでにさばいたと言う。体で行くことができなければ心で行って、そのような者をさばいてしまふ。それほどパウロはコリント教会を愛し、切実な思いに突き動かされていた。

[4-5] 「あなたがたが集まったときに、私も、霊においてともにおり、私たちの主イエスの権能をもって、このような者をサタンに引き渡したのです。それは彼の肉が滅ぼされるためですが、それによって彼の霊が主の日に救われるためです」

「霊においてともにいる」とは、幽霊のようになって、そこにいるということではない。

3節で言われているように、心においてそこにいるという意味。→マタイ18:20

ここでパウロは個人的な怒りにかられてさばいているのではない。「あなたがたが集まったときに、私も…ともにおり」とあるように、教会会議としての判断が下されるように主張しているのである。コリントではまだ実際はさばきがなされていない。それゆえパウロは自分がすでに霊において主イエスから与えられた権能をもってさばいているように、コリント教会は主イエスから与えられている権威、また力をもってそのような罪を犯している人をサタンに引き渡すようにと言うのである。これはサタンの支配するこの世に追放する、教会からの除名、破門のこと。非常に厳しい処置のようであるが、そ

の最終目的は「彼の霊が主の日に救われるため」である。処罰のための処罰ではなく、兄弟の悔い改めのためであり、回復のためにあえて破門、戒規に付すのである。このような処置には大きな苦しみ、悲しみ、涙が伴うものである。共に痛み、共に悲しみを覚える生身の愛がここにある。教会は主が再び来られる日に罪を犯した者の霊が救われるように、この問題に対処しなければならない。